HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ポスト小泉の課題
Author(s)	濱田, 康行
Description	巻頭言
Citation	農林経済, 9820, 1-1
Issue Date	2006-11-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/15825
Rights	本稿は農林経済（時事通信社）に掲載され、同誌の許可を得て転載するものである。「農林経済　2006年11月6日　9820号」に該当する。
Type	article
File Information	norin9820.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ポスト小泉の課題

新政権が発足しました。多くの人々は“期待と不安”の入り混じった目でこれを見つめています。

前の政権が“小泉劇場”と言われ目立つパフォーマンスを好んだ分、新政権はやりにくいだろうけど、選択肢は二つ。劇場を続けるか、少々の幕間をつくるかです。前者を選ぶとすると、改革の新たなシナリオが必要となります。前の政権は執念とも思える意気込みで郵政改革へと突進しました。これに匹敵する題材を探さないと目立ちません。それはなんでしょう。私のみるところ、ひとつは教育、他のひとつは農業です。もちろん、ここでのテーマは後者です。

食糧自給率は一向に改善されません。他方で、供給側の農家は減少し続けています。それが大規模化の誘因になればよいのですが、現実には放棄地になってしまう。北海道でも新たに農業を始める人に支援をしていますが、そんなに参入は多くない。北海道の農業への新規参入は平成 14 年度で 700 件しかありません。北海道で農業を始めると言えば、ややロマンチックにも響きますが、現実は厳しい。つい最近もこんな話を聞きました。札幌で知り合った若いカップルが、夫の実家の養豚業を継ぐことになった。ずいぶん悩んだ末に決断したが一年程しかもたず、サラリーマンに舞い戻った。確かに、都会の生活からいきなりゴム長に作業服で糞尿まみれという“落差”は大きい。北海道の東部では静岡県などからのお嫁さんの“誘致”をし、町ぐるみで歓迎行事までやるのですが定着率は未知数で未発表です。

しかしあらゆる経営は人のすること。そして、長期的展望を持ち、決断力、実行力、工夫する能力のある人がそれをすると成功の可能性があります。そういう能力が誰にあるかは事前にはわからない。しかし、人がいなくなってしまえばあらゆる事業はおしまいです。だから、“落差”とみえるものをとにかく埋めて魅力的にし“やってみよう”という人を集めなければなりません。では日本の農業を魅力的にする手法は何か。

① 経営すればそれなりの利益があがることを示す。ところが、統計上は農家所得は低い。もちろん、税金の関係もあって微妙ですが、統計に示されない経済的豊かさを強調する必要があります。
② サラリーマンと違って、生産する喜びがある。つまり人生の意味を見い出し易いことをアピールする。
③ 農業には協業が欠かせない。それを通じて人々の絆が作られ人々は孤独から解放される。協働の意義を示す。

②と③は農業関係者が自らすること、できること。しかし、①は今のところ経済原則だけで保証するのは無理で政策的支援は欠かせない。もし新政権が農業をテーマに改革シナリオを書くなら、この基本的なところを理解しておいて欲しい。

本音を言うと、人々は改革疲れで幕間が欲しい。そうするのも“やさしさ”なのですが。